キャラクター名
合鴨　真昼

プレイヤー名

シンドローム	ブラム＝ストーカー ハヌマーン	ワークス	UGN支部長B	カヴァー	高校生
オプショナル		年齢	17?	性別	女性。
覚醒	死	衝動	恐怖	初期侵食率	39　%
出自	忘却	経験	記憶喪失	邂逅	”救世主”

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	2	0	0			2
感覚	3	1	0			4
精神	2	0	0			2
社会	1	0	0			1

HP	26
行動値	16
(非装備時)	16
戦闘移動	21
全力移動	42

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	1		ＲＣ			交渉		
回避	1		知覚	1		意志	3	1	調達	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
武器～99%まで	白兵	2r	5			浸食5　HP消費3～12　攻撃力[消費HP]+21　【赫き剣】+【】
武器100%カラ！	白兵	2r	5			浸食5　HP消費3～14　攻撃力[消費HP]+24
		0				
”血槍・五月雨/Scarlet.Rain.”	白兵	2r	5	-5		浸食9　ドッジ不可+装甲無視+HP[+4]回復　【疾風迅雷】+【渇きの主】+【かまいたち】

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
思い出の品	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
亜純血	P	N		
イルク＝シュシェンスカヤ	P　憧憬	N　悔悟		
五條　武	P　信頼	N　隔意		
大怪盗チェッカー	P　執着	Nボコボコにする#		
アウラ	P 連帯感	N　不安		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:　4	残り財産P：　2

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
(D)疾風迅雷	3	3	メジャー	-	-	対決	ピュア	
効果：ドッジ不可　シナリオLv回								
赫き剣	5	3	マイナー	-	自分	自動	-	
効果：※武器　《赫き剣》作成								
先手必勝	2	-	-	-	自分	-	-	
効果：侵食値+4　行動値+[Lv×3]								
乾きの主	1	4	メジャー	至近	単体	対決	-	
効果：装甲無視、命中時HP[Lv*4]回復								
破壊の血	5	2	マイナー	-	自分	自動	limit	
効果：※《赫き剣》の性能強化								
かまいたち	1	2	メジャー	視界	-	対決	-	
効果：《白兵》の射程変更 攻撃力-5								
マシラのごとく	3	5	メジャー	-	単体	対決	80	
効果：攻撃力+[Lv*10]　シナリオ1回								
ライトスピード	1	5	マイナー	至近	自分	自動	100	
効果：C値+1　メジャーアクション2回行動　シナリオ1回								
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

“―――去りたい奴は去ればいい、何処まで行ってもわたし達は所詮“異端者“だもの―――“

数年前にFEによる《覚醒実験》に巻き込まれ能力に開花した少女。

『様々な状況下での死と覚醒の関係』を調べるべく、真昼も実験の対象として半覚醒状態に至るも失血量が多く能力の定着を待たず命を散らそうとしていた。

その時、実験を関知し救助の為に突入したUGN横浜支部の1人、“彼女“の能力により一命を取りとめたことをきっかけに覚醒に至る。

実験の段階で真昼自身の血はほとんど失われており、その影響か、元の生活や家族に関する記憶の多くが失われており、結果として保護観察の名のもとにUGM横浜支部にて身元預かりとなった。

それでも、支部での生活は真昼にとって決して辛いことばかりでは無かった。壱岐が、ウィズが、そして“彼女“が居た。

けれど、1年前、そんな“彼女“がジャームとして処分された。
それからはウィズの寝返りに、壱岐の離反と1日事に真昼の世界は崩壊していった。

壱岐か、あるいはウィズに着いていけばよかった…

いや、それは叶わない―――

真昼にとって、それでも“彼女“との思い出も“家“と呼べる居場所も、UGNにしかなかった。